

本山彦一と大阪毎日新聞社、大阪毎日新聞慈善団

山口 卓也

関西大学博物館学芸員

本山彦一は、1853（嘉永6）年8月10日熊本県に生れ、1871（明治4）年に東京に出た後、慶應義塾予科に学び、政府の租税寮を経て兵庫県庁に勤務、勸業課長や学務課長を勤めた。1882（明治15）年には大阪新報社に転じ、翌年、福澤諭吉の招きにより時事新報社に入社、会計局長として経営に参画した。1886（明治19）年、藤田組の支配人となって、児島湾開墾などを差配したが、1889（明治22）年、大阪毎日新聞社相談役を兼務、経営建て直しにあたった。1903（明治36）年、大阪毎日新聞社第5代社長に就任し、以後、その発展につくした。また、殖産興業や農業振興を目指した啓蒙活動、皇陵巡拝運動、慈善事業などを主催し、さらに自然科学分野から人文科学分野まで幅広い学術の振興・発展に寄与すべく、さまざまな活動を援助したことで知られる。

本山彦一の大阪毎日新聞社の経営や諸事業について、本格的予算制度の導入、利益金の従業員分配、株式会社への改組などの先進的改革による会社経営をしたこと、「大阪毎日新聞と東京日日新聞」「新聞商品主義の提唱」「映画事業」「英文毎日と点字新聞の刊行」などは（荒木1929）、企業経営や新聞社史、メディア開発などの視点から、すでに様々に研究されている。ここでは、大阪毎日新聞慈善団や本山自身のさまざまな社会貢献についてみていきたい。

大阪毎日新聞社と大阪毎日新聞慈善団

明治時代後半、日本国内で私企業や私人が社会福祉や慈善活動など現在の社会事業に類する活動を行うことは稀であったが、その中で本山彦一は、明治後半から大阪毎日新聞社の記念事業として手掛けることがあった。本山は、試行錯誤の中で欧米の知見を求め、ボストン大学で神学社会学を学んだ社会事業家生江孝之を、大阪財界と相談のうえで外遊させ、欧米における社会事業の実施状況を調査させた（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 461）。

大阪毎日新聞は、生江の帰国と調査成果の報告を待って、1911（明治44）年6月、創刊10000号記念の事業として、大阪毎日新聞慈善団（略して大毎慈善団）を創設した。明治天皇の下賜をもとに設立された済生会（5月30日）に初を譲った形で、続いての認可となった。

大毎慈善団の基本金には、1万5千円の基金と毎年の維持費は、大阪毎日新聞社の利益からの拠出と読者や、広告主からの義捐金が当てられた。のちには宝塚少女歌劇によるチャリティ公演の収益金が参入されて、本山の逝去までに66万5365円が寄付されている。

宝塚少女歌劇は、小林一三が箕面有馬電気軌道（阪急電鉄）の終点宝塚に設けた宝塚新温泉パラダイス館の余興として始まったが、1914（大正3）年から慈善団巡回病院のために慈善公演をおこなっている。本山彦一から小林一三に打診があったという。年末恒例の行事として1937（昭和12）年まで開催され、慈善団の財政に寄与したというが、あまりの盛況から、小林一三は入場料を取る常設劇場を構想したという。小林一三も慶應義塾の出身であることから、本山と福澤人脈が

あるとの指摘がある（小笠原 2004）。

慈善団の当初事業は、一、他の慈善団体の事業援助 二、罹災者救護 三、薄俸者救恤 四、貧民施療であったが、大正 11 年から改められて、一、疾病者の救療 二、罹災者の救護 三、薄俸者の救恤 四、他の慈善団体の助成 五、その他防貧又は救貧事業とした。大阪毎日新聞と東京日日新聞にも支部（のちに東京日日新聞社社会事業団）を置いて東西呼応した活動が行われた（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 463）。当初の事業援助ではなく、疾病者の救療が第 1 の事業となったことは、直接自ら行うという視点に転じたことが知れる。

本山彦一の慈善団の意図と目標（p 466）は、

「救済は一時的のものではなく、働けぬものを働けるやうにするにある。不生産者を起たしめて、生産者とするにある。故にこれによって個人はその能力を発揮し、一国の生産もまた、最も有効に増大する」と「慈善団の事業は社会的立場から見て、無形の利潤を収むるところの最も有利なる投資事業である」

にあった。慈善は単なる「施し」ではなく、被支援者が「支援」を受けることで最終的には自立自助を促すという、今日的な社会福祉と同じ発想であった。また、社会的に見て、自立した後は支援するための負担がなくなることも指摘して、むしろ有利な社会的な「投資」であるとしたが、この政策的な視点の先進性は、実に現代的であるといえよう。「慈善団」という名称は、今日的にみると、必ずしも理念とは整合していないだろう。

ただ、そのような判断があったとしても、本来主に「国」や「官」、国家や国民全体が政策施策として担う負担に対して、自ら社長を務める私企業である大阪毎日新聞社に、巨額支出のある直轄事業として慈善団を組織し、資金や労力を割くという自己犠牲を乗り越えたことに驚嘆せざるを得ない。社長としての本山個人の決断があり、大阪毎日新聞社自体も使命的社としてそれを受け入れていたのであろう。本山をして、稀有な人物の意味で「慈善病患者」（p 471）と呼ぶことがあったとされるが、本山が社長を務める大阪毎日新聞社にその気概があったことを認めることは、大正期大阪における本山彦一の最大の貢献への賛辞となるであろう。

福澤諭吉は、「経世済民」という東洋的概念と ECONOMY を結び付け、「経済」という新しい概念を日本にもたらし、国家や統治者に「済民」の重要さを示した。中村正直は、『西国立志編』の中で「富貴の人また自助の力を要す」として、自助自立さらには相互扶助の精神の重要さも知らしめた（福澤 1870）。日本の歴史と風土の中にあった本山彦一にも、欧米ピューリタニズム的勤労精神と互助精神にも近づいた同等の志は、すでに大きく育てて心の中に、自らを律するものとして確立していたかもしれない。

大阪毎日新聞慈善団では、分野ごとに下記のような活動が行われた。



図1 自動車による巡回診療

「巡回病院施設」 医療団が、大阪を起点として、東は名古屋から西は姫路までを巡回する。国内では、臨時大診療、トラホーム診療班、「大毎」「東日」ベッドなどが行われた。1921（大正10）年からは、大阪特有の川筋や運河を利用して、「大毎病院船」を竣工させて移動し、船内で無料診療無料投薬を行った。1927（昭和2）年には、150トンの鉄製病院船「慈愛丸」が竣工し、内科、小児科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、レントゲン科を設けて救療にあたった。1931（昭和6）年までに116次2,603日、実数173,406名の患者診療が行われた。

海外へは、1922（大正11）年には満州鉄嶺、奉天省各地、1923・24（大正12・13）年には朝鮮京畿道、1928・29（昭和3・4）年には全羅北道と慶尚南道、1932（昭和7）年には満州各地に、大規模巡回診療団が派遣された。

「罹災者救護」 1923（大正12）年の関東大震災の際、大阪から大規模な救護班を派遣し、東日巡回病院と合同した。朝鮮平城の大水害に朝鮮巡回病院を急行させた。1925（大正14）年北但馬大震災、昭和2.3年の奥丹後大震災にも救護班派遣などを行っている。

「妊産婦幼児保護」 大阪市内の乳児死亡遜減運動として、1914（大正3）年から嘱託産婆を配置し、東京では1923（大正12）年から、無料助産を行った。産科医を招聘して母親の健康相談を行った。

「盲人文化開発（故本山社長伝記編纂委員会1937 p 464 表記マ）」 大阪毎日新聞の点字大阪毎日新聞を発行するのにあわせて、点字巡回教師を置いて点字普及を行った。文部省委託で点字教科書を発行した。視覚障害学生の体育運動を助成した。点字出版物の出版と、点字読み方一覧表を配布した。点字投票のための講習などを行った。

「失明防止開眼検診」 失明防止のため、1928（昭和3）年の御大典記念事業として、開眼検診と治療を、大阪和歌山奈良で開催した。

「生業資金貸与」 1926（大正15）年から、大阪市の一部地域で、方面委員（現在の民生委員）と警察署で、個人事業の少額生業資金貸与を実施した。1927（昭和2）年から、刑務所からの釈放



図2 トラホーム巡回無料診療

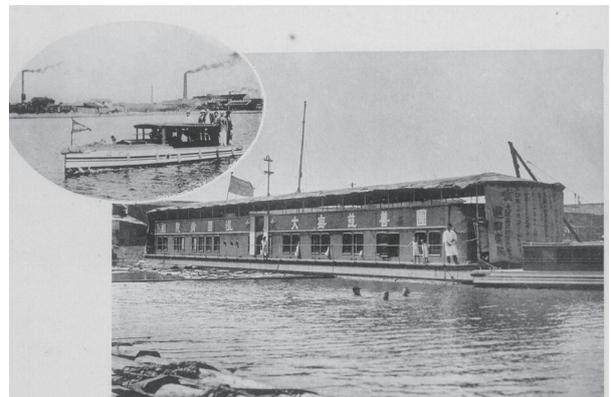


図3 大阪毎日新聞社慈善団病院船

者失業者への支援と司法保護事業支援を行った。

「社会事業助成」 他社会事業団助成を広く行った。さらに大阪毎日新聞社とともに歳末義援金運動が取り組まれ、義援金は貧窮世帯構成資金として大阪府方面委員により分配された（小笠原2001）。

その他、本山自身が孤児を濱寺の私邸に招いて、一日余興に興じたり、養老院や孤児院に寄付を続けた。1911（明治44）年には孤児院博愛社に建物を贈っている。

大阪毎日新聞慈善団の活動内容は、1918（大正7）年に発生した米騒動に端を発する都市部貧困者問題対策として設けられた大阪方面委員制度に近似し、相互に役割を分担しての活動があったことが知られている（飯田2018）。1929（昭和4）年の昭和天皇大阪行幸の時、方面委員代表者とともに、その後援会代表として本山彦一ら6名が拝謁している。

1931（昭和6）年、大阪毎日新聞慈善団創立20周年を記念して刊行された『大阪毎日新聞慈善団二十年史』の本山の序の冒頭は、

「一本の指のうづきは、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病ひに苦しむ者の在することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない。しかるに、生活不安の今日、人々は自己の身を守り、その福利を追ふことにのみ汲汲として、他を顧るの余裕をもたないやうである。かくては、人心の悪化するのはもちろん害毒のおよぶところ知るべきのみ。この時に当つて必要なるは、社会連帯の観念である。相互扶助の精神である。われ等は、今を距る二十年前、この点に着眼して、大阪毎日新聞慈善団を組織した。

蓋し、時勢の進運に伴ひ、貧富の融和と、人心の融合を図らんがためである。（以下略）」と記している（大阪毎日新聞慈善団 1931）。社会連帯の観念、相互扶助の精神を、本山彦一と慈善団に見ることができるであろう。

本山彦一の社会活動と奉仕

本山彦一が晩年役員となったり、所属していた公私団体の名簿がある。団体名からは活動内容がわからなくなっているものもあるが、大きく仕分けると、社会奉仕団体、顕彰奉祝団体、国際交流植民団体、大阪経済団体、学術教育研究団体支援団体、親睦団体などが見える。本山本人が役職として引き受けたもの、社会的地位立場見識によって乞われて就任したもの、人脈地縁からのもの、自らの学問的探究や趣味のために所属した学術団体、賛助した学校や教育機関、慈善団体の役職もある。大阪の大新聞経営者としての立場から推測すると新聞業界団体、富民協会から予測される農業関係団体が除外されているかもしれないが、その他の構成は、本山彦一の思想的、政治的、経済的、社会的、学問的、趣味的な、公私広範な活動範囲の反映であるとも考えることができる。以下紹介する（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 422-424 順序改変）。

日本赤十字社正社員（有功章） 大阪都市協會顧問 帝國水難救済會評議員 大阪府方面委員後援會評議員 勸險獎勵地方委員 生活改善同盟會評議員 大阪府失業防止委員會委員 弘濟會評議員 弘濟會事業後援會顧問 日本生命濟生會評議員 鐵道保養院理事 日本弘道會特別會員 大阪府立修徳館々友會賛助員 協調會評議員 實費診療所評

議員 大阪府衛生會理事 嗚呼坂結核豫防協會理事 大阪市醫師會委員 大阪體育協會
 評議員 全日本私設社會事業聯盟副總裁 關西私設社會事業聯盟總理 恩賜財團濟生會
 評議員 同仁會有功會員 財團法人日本少年保護協會顧問 大阪府少年保護團體聯合會
 顧問 石井十次記念愛染園理事 帝國水難救濟會評議員
 聖徳太子奉贊會理事 明治神宮奉贊會有功會員 伏見桃山皇陵會名譽會員 吉野神宮奉
 贊會副會長 楠公顯彰會評議員 四條畷神社奉贊會顧問 皇陵巡拜會々員 聖堂復興
 期成會評議員 豊國會顧問 北野會顧問 大阪弔魂會顧問 忠勇顯彰會評議員 帝國海
 事協會特別會員 海軍協會大阪支部評議員 帝國在郷軍人會第四師管聯合支部名譽會員
 報効會評議員 報効會大阪支部大阪軍人援護會評議員 帝國飛行協會評議員 國民飛行
 會大阪支部理事 大日本武徳會商議員（大阪支部常議員） 講道館後援會評議員 日本武
 教社名譽顧問
 内鮮協和會顧問 中央朝鮮協會評議員 滿蒙文化協會々員 南洋協會評議員 東洋協會
 大阪支部顧問 大東文化協會維持員 國際聯盟協會特別會員（大阪支部評議員） 全亞細
 亞協會相談役 大亞細亞協會相談役 東亞通商協會顧問 中日協會評議員 東亞同文會
 評議員
 中日親善會特別委員 日土貿易協會員 關西日米協會々員 日佛文化協會顧問 朝鮮畜
 産協會顧問
 大阪實業協會々員 大阪商工會顧問 大阪貿易協會名譽會員 日本工業俱樂部會員 帝
 國鐵道協會正會員 日本建築協會名譽贊助員
 皇典講究所監事 皇典講究所國學院大學財務顧問 慶應義塾評議員 早稻田大學贊助員
 關西大學評議員 長崎高等商業學校同窓會大阪支部名譽顧問 私立羽衣高等女學校々長
 私立關西商工學校社員 大阪市教育會特別會員 大阪府泉北郡教育會名譽會員 政治教
 育協會贊助員 洗心洞文庫理事長 宗教研究會々員 光壽會名譽會員
 天文同好會名譽會長 史學研究會々員 大阪史談會々員 東京地質學協會々員 考古學
 會々員 東京人類學會々員 三田史學會々員 東洋貨幣協會贊助員 科學知識普及會評
 議員 東京統計協會々員 博覽會調查特別委員 東亞勸業博覽會顧問 東亞勸業博覽會
 協贊會顧問
 イーエス會幹事長 春秋會々員 二水會々員 交詢社々員 日本俱樂部會員 大阪俱樂
 部會員 肥後俱樂部會員 濱寺俱樂部會員

社会事業・奉仕団体には、日本赤十字社や大阪府方面委員、生活改善同盟会、大阪府失業防止委
 員会、全日本私設社会事業連盟など、27 団体ほどが見える。医療や救貧生活支援、司法保護など
 があって、本山の慈善団の活動とリンクした「慈善病」の範囲が含まれる。いくつかは役職として
 運営に関与した場合や功労を認められた団体もある。

日本赤十字社正社員であった本山の「有功章」は、日本赤十字社が永年に渡り赤十字奉仕活動に
 従事した者、高額な社資の拠出者・寄付者、及び献血に貢献した者などを対象に授与する記章であ

り、本山個人の功績に対して授与されたものであろう。リストのトップに記載があることから、本山彦一本人も周りも誇りとしていたことがうかがえるであろう。

大阪府方面委員は、本山が河内国府遺跡を発掘した1918（大正7）年の米騒動直後に、大阪府で方面委員制度として、創設されたものである。委員が小学校区を一方面として地域を担当する方法で、商店主・工場主・医師・住職など地域の実情に詳しい人々が委嘱され、地域内で困窮者の生活相談・指導、戸籍整理、金品給与などを行った。この制度が全国都道府県に広がり、救護法（1929年（昭和4）制定1932年施行）の実現に際しては政府当局への働きかけを行い重要な役割を果たしたことで知られる。今の民生委員制度につながるもので、本山はその後援会評議員であったことがわかる。この方面委員は、本山の大阪毎日新聞慈善団とも連携して、大阪の市中民生支援で大きな役割を果たした。

恩賜財団済生会は、明治天皇の下賜金を基に大毎慈善団に先んじて設立された恩賜財団で、「生活困窮者を濟う（すくう）」「医療で地域の生（いのち）を守る」「会（かい）を挙げ、医療・福祉の切れ目ないサービス」を目的とする。本山は、この評議員となっている。

財団法人日本少年保護協会や大阪府少年保護団体連合会は、刑務所出所者の再犯防止と保護を担う団体である。石井十次記念愛染園は、孤児の保護と教育支援団体である。

顕彰奉祝、陸海軍関連など団体には、聖徳太子奉賛会、明治神宮奉賛会、楠公顕彰会、吉野神宮奉賛会などの社寺関係、大阪弔魂会や忠勇顕彰会など海軍陸軍関係、大日本武徳会や日本武教社、講道館の武術武道団体完形など、22団体ほどがある。

在郷軍人会などは、退役後の生活支援の意図があったかもしれない。皇陵巡拜會は、皇陵巡拝地図を配布した本山が1917（大正6）年に始めたものである。

国際交流植民団体は、植民地になった朝鮮、南洋諸島関係団体、アジア主義団体、中国やトルコ、アメリカ、フランスの親善文化団体などで、17団体ほどある。

内鮮共和会は、在日朝鮮人に対する内務省、警察当局を中心とした統制機関で、在日朝鮮人の失業や人権侵害などの社会問題への対策として作られた。中央朝鮮協会は、日本と朝鮮半島出身者の友好親善活動団体である。東亜同文会は、東アジア民間外交アジア主義団体である。国際連盟協会は、大阪毎日新聞で本山とともに活躍した原敬が首相であった1920（大正9）年に理事国として参加した国際組織のための協会である。

大阪などの経済実業団体としては、大阪実業協会や大阪商工会、大阪貿易協会、日本工業倶楽部、帝国鉄道協会、日本建築協会などがある。新聞関係団体は、社長職と連動しているので、除外されている可能性がある。帝国鉄道協会は、本山が藤田組支配人であったとき、山陽鉄道の敷設にかかわった経験からであろうか。

高等教育関係では、皇典講究所、國學院、慶應義塾、早稲田、関西大学の大学などがある。皇典講究所、國學院は、本山の皇室主義からの関与であろう。慶應義塾は、福澤諭吉に薫陶を受けて学んだ経緯から、関西大学は大阪の新聞人としての支援であろう。私立羽衣高等女学校は、晩年の本山が居宅近くの女学校校長に就任したものである。

学術教育研究団体支援団体としては、大阪等地方教育会、さまざまな学会や研究会、科学普及団

体、博覧会関係団体などで、19 団体ほどある。

洗心洞は大阪の陽明学者大塩平八郎の私塾名で、大塩の精神に共感しての就任であろうか。後継の文庫などは発見できていない。

明治 36 年頃に入会した東京人類学会と考古学会は、本山の考古趣味と結びついている。三田史学会は、慶應義塾の歴史学研究会であろう。東洋貨幣協会は、東アジアの貨幣史研究と交換会であったが、本山の古銭収集癖に連なるものであろう。

博覧会関係団体は、1924（大正 14）年、大阪市が「大大阪」となったこと、大阪毎日新聞が発行部数 100 万突破を記念して、「大大阪記念博覧会」と「こども博覧会」を開催した経緯からであろう。博覧会の開催は、地域の産業や工業、教育界まで含んだ大イベントであり、実施に際しての個人的調整調停能力を請われたのであろうか。

以上、本山彦一の晩年に所属した団体や肩書を俯瞰してみた。本山のこだわりや責任感は読み取れるであろうが、業界団体・圧力団体とみなせるものはあきらかに数少ないことがわかる。あと、富民協会から推測される農業関係団体、新聞社関係団体も見えないが、これも収録時に除外されているかもしれない。また、おそらく私的に楽しんだ茶会や数寄の集まりは記録されていない。

「慈善病」で深く拘った活動を行う団体名が多く見つかったことは、本山本人が慈善事業を行おうとするとき、恩賜済生会のようによく似た活動の団体であっても組織や人脈との連携を重視し、それぞれ相互に参加し役職を担ったことは、本山の一貫した精神の表れであろう。考古学や人類学、貨幣など興味がある分野の研究会参加は、学問趣味の表れである。

この団体名役職名からは、本山彦一の生涯が見渡せるように思える。これら団体の総会や会合に出席した際、本山は自らの言葉で丁寧な式辞、挨拶を寄せていることにも「こだわり」や責任感も見ることができるのではなかろうか。

参考文献

- 荒木利一郎 1929 『本稿本山彦一翁傳』 大阪毎日新聞社
- 飯田直樹 2018 『大阪の米騒動と方面委員の誕生』 大阪歴史博物館
- 老川慶喜 2016 『小林一三 都市型第三次産業の先駆的創造者』 PHP
- 大阪毎日新聞慈善団 1931 『大阪毎日新聞慈善団二十年史』 大阪毎日新聞慈善団
- 小笠原慶彰 2001 「方面委員創設秘話」『月刊ボランティア』第 365 号
- 小笠原慶彰 2004 「大毎慈善団と本山彦一」『京都光華女子大学研究紀要』第 42 号
- 故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松陰本山彦一翁』 大阪毎日新聞社
- 故本山社長伝記編纂委員会 1937 b 『松陰本山彦一翁遺稿』 大阪毎日新聞社
- 中村正直 1871 『西国立志編』
- 濱田信夫 2012 「日本の新聞産業を牽引した企業家活動」『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター WORKING PAPER SERIES』No.129 法政大学
- 福澤諭吉 1870 『西洋事情』



本山彦一書富民強身